

アフリカ先住民民族研究 安曇野の人類学者・田中二郎さん 国内外で賞を受賞

アフリカ南部・ボツワナで、狩猟採集民の暮らしや社会を研究してきた人類学者、田中二郎さん(74)が、安曇野市穂高IIが、約半世紀にわたる業績により、国内外の賞を相次いで受賞した。田中さんは「文明化の流れは止められないが、狩猟採集の社会に、人類が自然と共生するヒントがあるかもしれない」と研究の意義を語った。

(上野啓祐)

「人類社会の始原的な姿を探り出す研究」「世界の狩猟採集民研究の発展に大きな貢献をした」。こうした評価により7月に大同生命地域研究賞を受賞。9月には国際狩猟採集民会議が、発足50周年の節目に初めて設けた生涯功労賞を贈った。ウィーンで開かれた同会議の場で発表された「ザプライズ」で、カナダ人、英国人の研究者とともに表彰されたという。

「せいたくはできないが、食料に困ることはない。動くのは1日3、4時間ほどで、あとはおしゃべりをしたり、踊ったり。明日の心配をすることなく、自然を信頼しているように見えた」。現地調査した狩猟採集民の1970年代までの暮らしをこう振り返る。

田中さんは彼らを「ブッシュマン」と呼ぶ。近年、差別的なニュアンスがあるとして「サン人」と言い換えることが多いが、現地での経験から「現地語のサン人はより差別的で、ブッシュマンの方が適切だ」と主張する。

砂漠地帯の半径約50kmの範囲に4グループに分かれて暮らしていた。各グループは最大50人ほどで、自生するスイカやマメなどを求めて2、3週間ごとに移動。食料の8割は採

# 狩猟採集の社会に

# 自然と共生 ヒント

集に頼り、栽培も保存もしない。狩猟が成功すると、獲物を倒した人が独占するのではなく、全員で平等に分配するなど、格差のほとんどない社会だった。

田中さんをアフリカへ導いたのは、京都大の先輩たちの活躍だった。世界各地を探検して新たな学問を切り開いた今西錦司さん、梅棹忠夫さん、川喜田二郎さんらに憧れた。東大大学院時代の1966年、初めてボツワナに渡航。2011年まで計31回、時には幼い子どもたちを連れてアフリカを訪ねた。

転機は1980年の4度目の訪問。人々は1カ所で定住生活を始めていた。前年にボツワナ政府が定住化の方針を決めたという。97年には別の場所へと強制移住させられた。「近代国家としては、その日暮らしのような『野蛮』な国民がいては具合が悪かったのだろう」訪問を重ねるたび、定住の生活に

慣れていく住民たち。モロコシやマメなどを栽培し、ヤギの飼育に取り組んだ。建設工事や弓矢などの手工芸品の販売で現金収入を得た。井戸が設けられ清潔な水が入るようになり、小学校や病院ができて教育や医療を受けられるようになった。



ボツワナのカラハリ砂漠で、仕留めた獲物  
を運ぶ人々＝1971年、田中二郎さん提供

● **ブッシュマン(サン人)** ボツワナ、ナミビア、アンゴラ、南アフリカにまたがり、約10万人いると推定される先住民民族。アフリカ最古の民族とされる。ブッシュマンは英語で「やぶの人」の意味。周辺の民族の言葉から「サン人」とも呼ばれるが、差別的な意味があるとして、研究者の間でも呼び方は確定していないという。

一方、弊害も目立った。雨がほとんど降らないので収穫が少なく、食料配給に頼り、現金収入を得られる働き口も少ない。狩猟は馬を使って続けられたが、人口が急増したため平等な分配ができなくなった。酒が容易に手に入るようになると、暴力沙汰が増え、酒浸りになる人もいた。「文明化したのは、果たしていいことだったのか、悪いことだったのか」

狩猟採集の社会を知る田中さんは、複雑な心境だ。近代文明がアフリカの奥地まで行きわたった現在、地球温暖化や原発事故など、自然が危機にひんしていると感じる。

「人類が生まれてからの700万年で、99%は狩猟採集で暮らしてきた。人は自然の中でしか生きられないのに、私たちは何でもできると勘違いしてはいないか。後戻りはできないかもしれないが、考え直す必要があると思う」



「受賞は名誉なこと。今後はブッシュマンの民話などを紹介したい」と話す田中二郎さん＝安曇野市

たなか・じろう 京都大名大学教授。1941年京都市生まれ。専門は人類学、アフリカ地域研究。京大理学部卒、東大大学院博士課程中退。京大大学院教授を2004年に定年退官し、安曇野市に移住。著書に「ブッシュマン、永遠に。」など。